

日本政治基礎「政治学は現代日本政治をどこまでわかったのか」九月二十五日月曜日

Copyright: Takumin

法学部教授 大山耕輔

授業の目的、方法、教科書

目的 「政治学は現代日本政治をどこまでわかったのか」といった問題について、政治学や行政学の視点から考察し解説すること

方法 教科書を解説するスタイル

教科書 日本の政治第二版

スライド公開 <http://www.law.keio.ac.jp/~oyama/index.html>

ユーザー名 2006 パスワード politics

テスト持ち込み不可 論述と語句説明、表面のみ、ペン使用

出欠代わりのクイズあり

第一章 日本政治への疑問(講義録)

少し第一章はイントロダクションのようなものなので話をしたいと思う。皆さんに聞きたいが、教科書を持っている人は？手を上げてくれますか。どうもありがとうございます。ぜひこの本をエスサイズで、二千円しますが、ぜひ投資をしていただいて、それだけのリターンを求めている。正直言ってこの本は難しいです。一年生の職諸君にとっては何だこれと思うかもしれない。この年では難しいかもしれない。ただいい本なので、この本はなぜ、彼らが本を書いたのか。日本の政治ってどうなっているの？と外国人から質問されたらどう答えますか？外国人にもわかるような学者の本は意外に少ない、そういうことを著者たちは問題意識として書いた。そういう意味で外国人はい理屈っぽい、外国人のフレームワークを使いながら、日本の政治のフレームワークを当てはめるか。政治学のフレームワークというのは今習っているかもしれませんが、欧米のフレームワークが多い。欧米のフレームワークを日本に当てはめてみるとどうなるか。これを外国人と共有すれば、同じ土俵に立てる。議論が可能になる。フレームワークとは理論とかのこと。抽象的な話も多くなるが、これがわかれば政治学がおもしろくなる。参考書の話は省いたが、この本よりもよい本がある、というのは紹介するし、調べて使ってみてほしい。ネットのほうが本より早い、情報のよしあしがわかりにくいので注意が必要となる。

第一章ですが、日本政治の疑問ということ自体、外国人からの視点。政治とは何かというときに、ダールの who governs?誰が統治をするのか、誰が政策決定をするか、ラスウェルの who gets and how?いつ誰がどのように獲得したのか。獲得できた人間と失った人間と、政治もやはり支配するものと支配されるものとがある。やはり権力というもの、それを持つものと持たないもの。イーストンなんかは政治を価値あるもの、諸価値の配分なんかといういいかたをしている。金、権威、名誉など、価値あるものを権威的に分けていく。なんらかの力関係が存在する。日本政治を、見ていく

ときに、こういう一般論的な政治とは何かを見ていきますが、外人から見たときの日本政治に対する疑問。これは近代化という問題、ひとつは産業化、要するに富の拡大、経済発展ということ、もうひとつは民主化なのですね。つまりより多くの人が政策決定に参加するようになる、代表を選ぶ選挙に多くのものが参加するようになる。これも発展途上国のもうひとつの目標なのですね。日本もかつては明治維新を経て近代国家となったが、この際富国強兵などをやってきた。その近代化を日本はうまくやってきた。日本は例外的に成功した理由はなんだろうと注目された。日本も近代化が成功したとされたのは七十から八十年代。九十年代になってからバブルの崩壊、日本のプレゼンスが国際社会から消えていく。中国、アジアニーズの対等など。そういう意味では評価はよく変わっていく。日本の政治とはなんだろうという問いを、外人に説明できるようにする必要がある。そこで、世界の目から見た日本政治の謎について紹介したい。

で、どうして日本は急速に近代化したのか、最初に分析、政治論を展開したのが、六十二年にロンドンエコノミスト、これが日本特集を組んだのが最初とされています。私の生まれたころの話で、このころから日本の注目が始まった。七十年代、石油ショック、ドルショック、通貨危機がおこったわけですが、日本史、世界史で覚えているかもしれませんが、日本だけではなく、先進国共通の問題。統治能力の衰退という問題を生じさせた。ドルショックはドルの価値が、円など他の通貨に対して下がったために、ドルの信用がなくなってきたということがあって、結局為替レートを変動相場制にした。アメリカのドルによる世界平和、構築力において以前は独占的であったが、相対化され、先進各国間でのマネージメントが必要となった。石油ショック、中東の石油産出国の力が強くなり、石油があるが、価格を上げることによって先進国の産業力を下げる。結果政府の統治力も下げられる。物価が上がるとそれだけ富の生産力、税収、そしてサービス提供力が低下してしまう。財政赤字もこのころからひどくなる。問題は先進国が等しく統治能力の低下を経験したが、日本はうまくマネージメントできた。七十、八十年代の日本は統治能力をいまだに有していた。で、やはり外国から見るとなぜ日本はうまくやっているのかが謎として見えた。モチヅキ、日系三世の方ですが、日本政治の課題として三つ上げている。なぜ官僚主義を避け、市場の強さを維持できたのか、国際危機で、社会的要求をどのように吸収して行ったのか、なぜ自民党は政権を維持できたのか。なぜそれだけ長く政権を維持できるのか。他の先進国では大概政権交代や連立組み換えがあった。日本では自民党の中での展開しかなかったのはなぜか。今の民主党の問題にも繋がる話。政権交代は小選挙区制を持っているアングロサクソンではよく起こる。ドイツ、フランスなどヨーロッパでは比例代表性をとっているところがおおかったので、少数党も大丈夫なので、連立の組み換えがおこる。日本は連立組み換えすらおこっていない。非常に安定していた、なぜなのか、現在に繋がる考え。

スライド展開

話は、日本が成功した時期になるのですが。八十年代をイメージしてほしいのですが、みなさん何年生まれですか。八十八年くらいですか。イメージできませんね。ちょっと感覚的にはわからないかもしれませんが、想像してみてください。フォーゲルがジャパンアズナンバーワン、などを書いたとき。国際危機に日本がうまく立ち回ったことが影響した。なぜうまく立ち回ったのか、成功したの

か、ひとつは経済が強かった。マーケットの力が強かった。国家から見れば、統制、許認可権。マーケット、ガバメント、上と下ではなく、中間としての制度、インスティテューションに注目している。欧米ですと企業と政府は対立しがちであるのに、日本では協力する傾向がある。そこに秘密がある。どうして政府と企業は協力するのだろうかという、そういう彼らの認識にあった。同時に教育、福祉、防犯、今では防犯は状況が変わってきていますが、必ずしも成功とはいえないかもしれませんが、当時はうまく行っていったのですね。社会と政治がうまくいったのですね。例えば、ジョンソンが「通産省と日本の奇跡」という本を書いた。通産省が企業と協力してきたから日本は成功したのだというのですが、発展指向型国家、英語だとデベロップメントステートメントというのですが、これが日本のことを言っていたんですが、韓国や香港、台湾などアジアニーズ、最近はそのような表現はしませんが、そういう国々が出てきた、これらのことを発展型国家といった。これは経済発展を最優先する国であるとした。アメリカであるとかイギリスなど、アングロサクソンなどを既成国家だと言った。これは市場原理に基づく。政府は市場が構成に機能することを規制するだけ、ジョンソンは日本のことを発展型国家という風にみなして分析を進めたが、発展型国家は民主主義ではないのかという問題が出てきた。確かにアジアニーズの国は民主化が遅れていた、八十年代では、権威主義、社会主義の体制であった。日本も実はそういった国に近いのではないかという提議。日本は戦後に民主国家となり、経済発展を成し遂げた、これが日本であった。民主主義の質という面では問題があるのではないかという考え。ほかのアジア諸国は、戦争に負けて強制的に民主化されたわけですが、その中で経済発展をしたのは日本だけ、ほかの国はまだ権威主義体制であった。ほかの国は経済発展から民主化へと移るのだが、日本は民主化し、経済発展した。ジョンソンはよく修正主義といわれる。なにかというと欧米では近代化すればその国はわれわれと同じ国になるという思い込みがある。そういうのはおかしいというのがジョンソンの考え。日本等はそうはならないという考え。談合などで閉鎖的な体質を保っている。日本は異質だという考えを展開した。日本はわれわれとは違うから批判をしてバッシングの先方となった。今の中国がアメリカから人民元切り上げを要求されているようなことを日本は経験していた時代。八十年代後半の話。ジョンソンの修正主義について、貿易摩擦の苛立ち、日本の敵対的な兆候、経済行動を変えない、構造協議が日米間しかおこなわれていない。実態はアメリカからの要求があった、日本の市場が閉鎖的なのでオープンにするよう、具体的に要求するチャネルとしてこの場を設けた。これが日米間だけ。それからジョンソンは政治学者なので、冷戦後、日本の役割に関心を持っていた。自由貿易の原則、ジョンソンは日米の貿易関係については自由貿易でやっているとアメリカは日本にいいところをもっていかれてしまう。要求を出して日本をこじ開けていかなければいけないと考えた。ただ、アメリカは多種多様な人もいますので、親日論者もいた。日本政治を理解するために極端な評価をする学者を紹介することで、時代と共に評価が変わった様子を見てもらっている。

ウォルフレンという人がいて、オランダ人ですが、日本異質論を書いた。彼は一言で言うと日本の政治は欧州の意味での政治は存在しない、あるのは日本の独特なシステムだけだ、政治はない。どういうことか、あるのは日本のシステムだけで、権力を分かち合う小集団、トップがない、究極的な政策決定の責任を負うトップがない、つまり政治がない。顔がない政治、日本の政治で言え

ば、各省間のセクショナリズム、つまりそれぞれの縄張り争いというようなもの、自己主張をしている各省がいるだけ、各省の利害調整は本来政治がおこなうのだが、彼らは政策決定も利害調整もしないということ。セクショナリズムは日本政治の問題としてよくあがる、功罪があって、ひとつのポイントして、非常に日本の政治は分権的であったということ。トップがいないという集権化された制度ではなかったのではないかという批判。

スライド展開

日本政治への評価がぶれるということですが、どういう原因があるのか、少し考えてみたい。教科書は古いので最近のことは書いてないが、最近では中国への注目が明らか。日本には最初はプラスの評価、六十、七十年はそうでしたが、その後、不透明でリーダーシップのない国とみなされてきた。小泉政権では官邸主導というようなものがはっきりしていった。著者も最近京都大学のグループで日本政治の三十年間の変動について書いているのですが、官邸主導が、分権的な政治から集権的な政治へと代わって言ったとされている。欧米のひとが日本の評価が変化していくのはなぜか、評価する前提、基準が変化するからではないか、六十年代は戦後復興、欧米は産業化と民主化がうまくいったが、欧米人でないアジア人が同じように産業化と民主化を達成したことに驚いた。非欧米ができたことに驚きがあったようにおもわれる、ですから、見た目では欧米人とは違う、異質な日本人が文明化に成功した、福沢先生は文明と野蛮の間に半開があるといったが、文明国の中にどうやら日本が入っていった、なぜ異質な彼らができたのか、われわれ欧米とおなじ要因を彼らが持っていたのではないかと分析した。八十年代になると日本がうまく行き過ぎていて、欧米、アメリカの脅威にすらなくなってしまった、批判的になった、民主主義の価値観を守る、談合をなくすなど、同質でないと困るという風になってきた。ですから違う要素を日本人はまだ、なぜもっているのか、ジャパンバッシングをしたほうがいいのかという展開になってきた。

スライド展開

政治研究の中で、経験的な政治研究の中に位置づけたいと思うのですが、多元主義というもの、これがひとつのポイントになる。皆さんに聞きたい、多元主義という言葉を聞いたことのない人手を上げてください。多元主義についてわかっているのですね。多元主義とは、エリート主義と対抗する考え方なのですが、これも時間が必要なので、今日はこのくらいにしておきましょう。